ポスターが映す世相　ラジオ

美術工芸資料館は、2010年度に詩人谷川俊太郎氏より181点におよぶアンティーク・ラジオの寄贈を受け、これを機に「ラヂオの時代　ー谷川俊太郎コレクションを中心にー」展を開催する（2011年3月22日〜5月8日）。氏のコレクションは、真空管ラジオからシングルスーパーまで、とりわけ1930年代アメリカのラジオが揃う。それは、当時のラジオが、工業製品でありながら機能とデザインをうまく融合させた「家具」として家庭の中心に置かれたものであったからだ。

ウッディ・アレンが自らの幼少期を回顧したかのような映画『ラジオ・デイズ』（1987年、ウッディ・アレン監督脚本）を見ると、ラジオが常に家庭の中心にあったことがよくわかる。ニューヨーク、クイーンズ地区のあるユダヤ人家庭の日常を描いたこの映画の舞台となった1930年代から40年代は、ラジオ放送の絶頂期。家具のようにリビングに置かれたラジオ受信機は、美しい音楽や胸躍らせるドラマ、あるいは最新のニュースが家に居ながらにして楽しめる魔法の箱であった。グレン・ミラーのスイング・ジャズに合わせて踊り、スポーツ中継に熱狂し、事故現場からの中継では、固唾を飲んであるいは被害者の無事を祈りながら、じっと耳を傾ける。ラジオ全盛の時代、電波にのった音はリスナーと世界を、家の内と外をつなぐ見えない糸であった。

今日一般的に、クラシックなラジオとして想起されるデザインがアール・デコ・スタイルを纏っていることも、ラジオが「家庭の中心」であった時代を反映していると言えるだろう。優雅で未来的なデザインであったアール・デコ・スタイルは、世界恐慌から立ち直ろうとする人々がラジオに求めた夢のような世界とマッチしていたのである。ニューヨーク、マンハッタンのロックフェラー・センターにRCA（アメリカ・ラジオ会社）が1932年に建てたアール・デコ・スタイルのビル「ラジオシティ・ミュージックホール」が、ラジオ放送と劇場の複合体として当時のエンタテイメントのメッカとなったことは、人々の夢とラジオとアール・デコ・スタイルの融合の象徴となった。

1. アルモスト・ホフバウアー「ミクロフォーナ」 1930年代　AN.4850-1

美術工芸資料館に所蔵されているラジオのポスターは残念ながら数少ないが、アルモスト・ホフバウアー（1869-1944）による《ミクロフォーナ》（1930年代、AN4850-1）は、ラジオが人々の耳を虜にしていた当時の雰囲気をよく伝えている。高級感を強調した木製のラジオの横では、竪琴を抱えた女性が美しい歌声を響かせる姿が描かれている。これは、ラジオから流れる音楽に合わせて歌う姿ではなく、スピーカーから聞こえる美しい歌声を視覚化したものであろう。足下に寝そべる犬は、妙なる調べの心地よさと家庭の団欒を象徴しているかのようだ。画面中唯一写実的に表されているラジオ本体は、マントルピースやローチェストの上に置かれるような当時としては小型のものであるが、ダークブラウンの色調や大きな木目、窓を思わせるスピーカースリットなど、重厚感を演出したデザインになっている。ラジオは電波を受信する機械であるだけでなく、生活を華やかにそして豊かにしてくれる「家具」でもあったのだ。

「家具」として家庭の中心にあった時代を終えても、ラジオには常に私たちの青春が刻印されてきた。寝床にポータブル・ラジオを持ち込んで、親に知られないようにこっそり深夜放送に聞き入っていた若者たちにとっては、まだ見ぬ大人の世界への入り口でもあったし、1970年代のFMラジオブームの頃には、ラジオDJは憧れの職業であった。だがラジオ放送が「楽しさ」だけを提供してきたわけではないことにも触れておこう。それはラジオあるいは「放送」が常に、その速報性と広域伝播性において政治的な力と結びついているということである。極めて簡便な送信が可能であるラジオは、被災時に不可欠な情報ツールである。だが一方、例えば超長距離送信が可能な短波ラジオ放送は、1927年のオランダ国営放送を皮切りに、当初から植民地向け放送や海外宣伝放送として利用されてきた。東西冷戦時代に西側の自由主義プロパガンダにラジオが利用されたことは記憶に新しい。海賊放送とも言われる自由ラジオが、ナチス・ドイツへのレジスタンス運動から始まり、今日もなお体制からの圧力への草の根的抵抗のシンボルとなっていることも、ラジオが持つ政治性を指し示している。映画『ラジオ・デイズ』の中では、日本軍による真珠湾攻撃がラジオ・ドラマの生放送を中断する形で伝えられた。これは、楽しき時代の終焉をラジオ放送の中断と重ね合わせたエピソードにすぎないかもしれないが、言い換えれば、緊急速報が流される瞬間、ラジオはその本来の顔を覗かせるのである。日本では戦争終結を告げる玉音放送を思い浮かべる人もいるだろう。《粛正選挙とラヂオ》（AN5383-34）は、粛正選挙を訴えるラジオ放送を告知するポスターである。粛正選挙とは、1920年代から30年代にかけて行われた啓蒙運動で、当時横行していた買収や贈収賄などの不正な選挙運動を防止し、公明正大な選挙を呼びかけるものであった。このポスターの画面を大きく占めるラジオ・マイクは、粛正選挙を訴える「声」の強さと重要性を象徴しており、国会議事堂の上に漂う暗雲を声の力によって吹き飛ばそうとしているかのようである。だが同時に、このラジオ・マイクは国会議事堂を後ろに従えることによって、そこから発せられる声が政治的な力を背景にしていることを如実に物語ってもいるのだ。その意味でも、ラジオから流れる音は社会の響きなのである。

2. 作者不詳「粛正選挙とラヂオ」 1920−30年代　AN.5383-34

美術工芸資料館准教授
平芳　幸浩